
転生者の祓魔師

不純の道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者の祓魔師

【Zコード】

Z5922X

【作者名】

不純の道化

【あらすじ】

これはよくある転生ものの死にかたで死んで転生した兄妹の物語です。

まったくもつての駄文です、突然やめるかもしれません、作者は原作を持っていません、それでも良い方は読んでくれると嬉しいです。作者は最近青工ク全巻買いました。

プロローグ（前書き）

読もうと思つてありがとうございます、不純の道化です。
書きかけの小説をやめたその日に新しい小説を書いた大馬鹿者です。

では本文です。

プロローグ

? ? SIDE

俺はさつき死んだ。

別段珍しい死にかたではない、飲酒運転の車にはねられ死んだ。
変わっているところと言つたら歳がさほど離れていない妹と死んだ
ことだろうか、まあどうあえず。

「知らない天井だ」

「うーん、君といい君の妹といいにもうちょっと驚いてくれないかな
？」

なんか小さいのがしゃべりかけてきた

「誰だお前？」

「スル！？え？え？死んだはずなのに誰かにしゃべりかけられた
のに華麗にスル！？」

騒がしいな、この低身長のハリーママムは

「ま、まあ私は神様だ！（エツヘン）

神？このチッこい女みたいな容姿のが？無い胸張つてるし

「そうか、で、神様とやらが何の用だ？」

「え！？神様にあつたのに挙むわけでもなく、何するわけでもなく
挙句の果てには敬語さえ使わない！？初めてだよこんなの！」
五月蠅いな、ん？何か重いぞ？」

「ああ、今妹さんが上にのつかてているからそれで重いんだと思つよ
「ですか、さつきの質問に関してだが俺は神様なんか無責任な人間
が作り出した愚像的なものにしかすぎず、もし入ようがそこまで絶

対的な力は無いと思つていいからな」

「うーん、たしかにそのとうりなんだけじね。そりだそりだ、一番田の質問だけじね」

「一番田の質問? ああ、あれか

「すみません、あなた達を間違えて不幸な人生に追いやつた拳句殺してしまいました。お詫びとしては何ですがあなた達を青エクの世界に転生させてあげてあげます」

・・・

「殺すぞテメえ」

お、妹がしゃべった。

「すみませんすみません、メンゴメンゴ、代わりに能力とかつけてあげるから許してください、やうしないと上にばれて怒られるんだよ」

思い氣つし、自分の保身のためだなこりやでも、まあ、悪くはないな。

「どんな能力だ?」

「望むならチートでも、奇跡の石でも、賢者の石でも、不老不死でもあげるよ?」

うーん、そこまでだとなー。つーか全部チートじゃね?

「ちなみにあなた達がどうあがこいつが原作ブレイクはできないからね」

まあ、いいけど。

「決めるからちょっと待つてて、ほらお前も一緒に考へるぞ」

「はーい、どんなのがいいかなー、あいつを殺す能力とかはどうだるう?」

「おれと姫の丑つむな」こつせ

「ひこつー。」

「エエぬなよ・・・つーか拒むことはできませんのか?」

十分後

「よし決めた!」

「私も!」

「うん、一緒に画ねないと画策していたんだなこれが

「ど、どんな(ビクビク)
まだビビってるよ。

「手騎士ティマーの才能、出せるのは狐妖怪全般、もちろん白面金剛九尾も
な。あと騎士ナイターの才能もな、魔剣をつけてくれると嬉しい。それから
勉強の才能は今まで言こや」

コンだけありやあ十分

神「え? それだけ? そりやあ、強いけどたったそれだけでいいの?
「俺はな、妹のも聞いてやれ」

「つ、うん(ビクビク)

だからなゼビギるへあやつか、神の一画は禁物だっけ?

「私はお兄ちゃんと一緒に手騎士ティマーの才能、出せるのは狸妖怪系全般。
もちろん陰神刑部狸もね。あと竜騎士ドラグーンの才能もね、銃も付けといて。
あとは勉強の才能も今までいっし、まあこれくらいで許してや
るよ」

「あつがとつゞります(土下座)

中三の女子中学生が神をひれ伏してゐる光景。つーんシユールだ

「ああ、両親だけが青い夜で死んだ上、一級祓魔師で学校はもちろん正十字学園、祓魔塾にも通っているし、妹さんは特別に祓魔塾にはお兄さんと一緒に通ってる、お兄さんは奥村燐と一緒にクラス、もちろん希望どおりの才能、武器、あと私からのセサやかなプレゼントをあげるよ。これでいい？」

「おい、セサやかなプレゼントって何だ？」
「んでもないものじゃないよな？」

「えーと、あれだ、人脈かな。それと、とある魔術の禁書目録の魔術の才能、あ！ちなみに才能は全部努力しないと開花しないからね。それならいい、苦労はある程度した方がいいしね。」

「それから、今の名前は忘れてもらひつよ、記憶もあいまいになるから」
転生の意味ねーじゃねーか！？でか床に六！？

「逝つてらっしゃい。おつと間違えた行つてらっしゃいー
二タニタ笑うな！…！」

プロローグ（後書き）

読んでくださいありがとうございました。
明日も投稿すると思います。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

登場人物紹介（前書き）

今回は人物紹介です。

では本文です。

登場人物紹介

神木 かみき
八神 やがみ

本作の主人公、青い夜で生き残った母親の実家が神木家だったためこの名字になつた。つまり出雲とはいと二。

転生前の記憶があいまいで確実に覚えているのが自分と妹が転生者で、神にあつた事、転生前の両親が強盗に襲われ死んだ事、そしてその強盗を殺した事だけは、はつきりと覚えている。

外見は目が常に不機嫌そうなのを除けば整つており、背も高い方は入る。

勉強は転生前からかなりできており正十字学園に特待生として入れているほど。

性格は表面上は良い部類にはいるが本質は破綻しきつておりすべての事柄を設定としか見ていない。

魔術はルーン、特に炎をよく使う。エクソシスト達には使い魔の一種とみられている。

魔剣 贊殿遮那

常に強者を求めており、また自分自身が強者と認めた者にしか従わない。

過去に自分を従えた祓魔師の闘い方を使い手に教える事が出来る。

自分を従えた者の長男がいる限りは悪魔に戻らない。（それでも強い意志がなくてはいけないが）

本作では悪魔の力の無効化、及び使い手の使い魔との一時的な融合による属性の追加が能力となっている。（ルーンの炎もまとわせることが可能）

使い魔

狐妖怪全般を扱える、神木家では稀代の天才として扱われているが本人はたいして何も思っていないようである。

ルーンによる炎もこちらでは使い魔の一種という認知である。応用として灼眼のシャナの炎髪灼眼の討ち手の自在法も使える。

天目一個

史上最悪の悪魔エクソシストと祓魔師、悪魔双方から言られた悪魔。

姿は灼眼のシャナに出てくる天目一個と同じ。

贊殿遮那に今は憑依しているが持ち主が望めばこの世に具現化する。

神木かみき
九城くじろ

基本的な設定は八神と同じ。

年齢は兄より一つ下といったところ。

性格は表面上は良いが、本質はやはり兄ほどではないにしても破綻しており家族以外はどうなろうが知った事じゃないと思っているが、

命については平等に見ている。（裏を返せば虫を殺すように人も殺せると撃いことだが）また極度のブラコンでもある。

魔術は兄同様、ルーンの炎を多用していたが自分に合わないとやうことで、神に頼み（脅し）ぬらりひょんの孫に出てくる花開院 竜二の使う式神に変更した。

銃

ヘッケラヨツツボムジー H & K M P 7 をエクソシストように改造したモノを二丁ずつ持つている、またルーンを刻んだ玉も持つておりそれも撃つ。

使い魔

狸妖怪全般を扱う事が出来、神木家では兄同様、稀代の天才といわれているが本人はたいして何も思っていない。

げんげん 言言／牙狼

水でできた式神（使い魔）。相手の体の中に入り込み相手の体液を操る。

きょうごく 仰言

水でできた式神（使い魔）。水より純度が高く、あらゆるもの溶かす金生水でできている。

ルーンによる炎はこちらでは使い魔の一種とみられている（兄同様『魔女狩りの王』^{ウス}が使えるがハ神ほどには精密には動かせない）

登場人物紹介（後書き）

今後も追加していきます。

11 / 5 改編

祓魔塾（前書き）

登場人物紹介はどうでしたか？

では本文です。

祓魔塾

八神SIDE

俺は今、正十字学園の入学式を受けている。
それにしても偉い奴はどうしてああも長つたらしい話が好きなんだ
ろうか、長いだけでたいした中身がない、非効率の極みだな。

数時間後

今俺は祓魔塾の教室で自己紹介をするらしい、どうも塾の方は今日
から授業があるらしいそれでだろう（妹はなんやかんだって塾は
一緒に受けることになった）しかしあの奥村燐だつたか？何であん
なに騒いでたんだ？

まあ、いいか。

どうせそんな設定何だらうしな。

お、次は俺の番かじゃあいつてやるか。

「初めてまして、神木八神です。手騎士ティマー、詠唱騎士アリア、騎士志望です。
この剣は父親の形見で魔剣です、銘を『贊殿遮那』にえとののしやなといいます、ま
た魔法円はすでに持っています。ちなみに九城は妹で出雲はいとこ
です。」

なんか、出雲が睨んできたような気がするな、まあ、あいつとは折
り合いが悪いしな。

次は九城か、「転生者でーっす」とか言わないよな？

「初めまして、歳は皆さんより一つ下ですがよろしくお願ひします。お兄ちゃんの言つた事は本当だからね。なりたいのは手騎士ティマー、詠唱ア騎士リア、竜騎士ドラグーンです。お兄ちゃん同様魔法円はすでに持っています。」

はあ、良かった。ここまで来てこの設定を壊したくはないしな。

てかもう授業があるのか?えーと一番最初はの授業は・・・魔障か・
・・もうあるしいか、その次の授業は、お!魔法円か、使い魔が
だせるな、なにだそりゃ?白面金剛九尾はどうかな?『魔女狩りイノケンティ』
の王ウスはどうかな?両方強すぎるからやつぱこには、白孤はくじが妥当か
な?あと炎剣と、まあこれでいいか。

一限目

「稻荷神に恐み恐み白す 為す所の願いとして成就せずといふ」と
なし(ぼんつ)

白孤が一体でたな、しかしあれだけでなんで威張れるんだ?

「そなたは何を望む!そなたは何を欲する!厚かましき者よ(ぼん
つ)

化け狸が五体出てきたな、欠伸をしてるよあいつ

「ほう、化け狸が五体か・・・凄まじい才能だな・・・」
ネイガウス先生が褒めてるけどあれは九城の本気じゃないぞ

「ん?たつたこれだけが?望むなら陰神刑部狸でも出そうか?ネイ
ガウス先生」

「な!?そんな大妖怪まで出せるのか!-?」
まあ、本当に出せるだけなんだがな

「うん、うだけど。ちなみにお兄ちゃんは白面金剛九尾も出せるよ」

「うか・・・いや出さなくていい、！」で出されると生徒達が才能という壁に当たつてしまふ可能性があるからな・・・」

そりやそうだ、別にどうでもいいけどな

「じゃあ次俺ね」

「炎よ（k e n a n）」

みんながこっちを振り向いてるな、さつきの九城の説明でこっちを見てるんだろうがな・・・、じゃあ見せてやるよ、神からの贈り物をな。

SHDEOUT

「炎よ（k e n a n）」

その言葉と同時に八神は大量のカードをまいた。カードはラミネート加工したルーンカード、その枚数は数千枚、数としてはたいしたことないがここで見せるには十分すぎる威力を込められる枚数であつた。

「巨人に苦痛の贈り物を（P u r i s a n N u p i n G e d o）」

その言葉と同時に炎剣が湧きでた。

「この剣は摂氏2500度、人肉は摂氏2000度で『焼かれる』前に『溶ける』し、悪魔にも十分すぎるほどに威力があるな。どうも下級使い魔を大量に出して圧縮したものらしいな」

淡々と炎剣の説明をするハ神に対して塾生たちは数人を除いて呆然とした、そして例外の一人がこう言つた。

「すげーー!どうやるんだそれ!？」

屈託のない言葉どなりの羨む顔で燐がハ神にこう言つたそしてハ神が

「こじつはじうも特殊な才能らしくな、親戚は妹を除いて誰も出来なかつたぞ」

といい、なんやかんやでこの二人は友人になった。

夜

「どうでしたか?」

夜、ある学生寮で雪男が何者かに電話をかけていた。

「まあ力タカつたですが初授業にしては上出来でしたよ」

ある人物とは、メフイスト・フュレスこの学園の理事長にして正十字騎士団の名誉騎士であった

「・・・いえ僕じゃなくて」

自分に対する評価をあまり気にせず別の事をきりだした。

「ふむ」

「あの炎は悪魔に有効でした、使えます。不安定でまだ感情に振り回されているようですがセンスはいいよつだ」

今相談しているのは奥村燐の力の事であった。

「自在に使えるようになれば我々正十字騎士團にとって最高にユニークで最強の兵器になるでしょう」

「じゃあ・・・」

「ただし監視は必要です使い物になる前に騎士團上層にバレたくないですかね」

「まあ、時間の問題でしょうか・・・」

「・・・・・わかつています。それと・・・・」

燐に対する事は終わりそして・・・

「ええ、あのハ神君の技術ですね。私も初めてみました、下級悪魔とはいえあれだけの数を出すとなると・・・しかも圧縮するとなると・・・彼らもまた監視が必要です」

「彼ら？ 彼じやなくてですか？」

解つていながら。そんな口調で問い合わせる雪男の対し

「九城さんもです」

半ばめんどくさそうに答えるメフィスト

「・・・解りました。そうします」

「結構、結構ではまだどこかで」

こつして、危険因子および謎の因子の相談が終わっていった

祓魔塾（後書き）

「うわー、構成がめちゃくちゃだ！！！
読んでくれてありがとうございます。」

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

記憶（前書き）

今回は主人公の転生前の話をします。
では本文です。

八神SIDE

塾が終わった、その後燐にローンの事を教えた。（燐はすぐに頭を抱えて雪男先生に連れて行かれた）

九城は鍵で家に帰った。俺は寮に帰つて寝ることにした。

夢を見た、転生する前の、唯一はつきりと覚えているあの事を

俺と九城で（転生前の名前は神によつて消された）家に帰つていた。いつもどつり、本当にいつもどつりだった。

当時俺は中三、九城は中一だった、性格は破綻はしていなかつた。それどころか優等生だったと思つ、勉強の才能はその当時のままなはずだし、たしかどこかの委員会の委員長をやつてたはずだ。

家に帰つて扉を開けると父親と母親が死んでいた、いや、殺されていた。

強盗が一人包丁を持つて立つていた。

その時俺は尊敬していたはずの両親を尊敬できなくなつた。
二人でかかればやり返せたはずだ、そう思つた。

強盗がこちらに襲いかかってきた、俺は確か授業で使つた彫刻刀で応戦したはずだ、九城は台所にいつて包丁を持つてきた。
それから俺達は、血を流しながら、返り血を浴びながら、強盗に勝つた。

そのあと九城が警察にこう通報した。

九「両親が強盗に殺されていました。その強盗は私達がどうにかしました」

声色一つ変えずにこう言った。

警察が来た、婦警さんが「怖かったね、怖かったね」と言つてくれた。実際俺は何も感じていなかつた。

通夜が終わり、葬式も終わつた後、学校が授業料を免除すると俺達二人にいつた。私立で中高一貫校だつたからありがたいと思つた。

それから数日全ての人たちが俺達一人を慰めた。

だが俺達はその人たちを軽蔑するようになつてゐた。
その人たちは大事なことを忘れてゐる。

俺達も強盗同様、人を殺してゐるという事に

あの時俺達は強盗を殺した、目は虚ろだつたから薬物中毒者かもと
思つた。

俺達一人で殺せた強盗に殺された両親、世間体のために俺達一人を見捨てた両親、俺は両親にそう言つテレッテルを貼つた。

それからも表面上はいつもどうりを演じた。

九城は俺にのみ懐くよくなつた、他の人にはただの両親が死んだ
後の普通の兄妹の光景だと思つていたようだがそれは違う、

親が殺された後は普通は学校なんか来ない。普通はそうにきまつて
いる、それを忘れていた人たちをますます軽蔑するよくなつた。

神のミスで死ぬ頃にはたしかもう全てを設定としか見ていないような気がする。だが周りの人にはばれなかつた、九城にはばれてたようだがその関係だけは設定とは思えなかつた、そう、それだけだつた、それだけが設定では無く当時のまま、いやそれ以上に好きだつた、九城が・・・

そんな夢を見た。そんな別にたいした事のない。そして、とても大切な記憶の夢を・・・

記憶（後書き）

どうでしたか？これが主人公が破綻した原因です。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

祟り寺のナゾー（前書き）

原作介入します。はい
ちなみに主人公は原作の知識は消されております。
では本文です。

黒川君のナマの

八神SHIDE

「起きなさい、奥村君。奥村君」

「スキヤキー？」

何言つてんだここのは？授業中（一限目）に寝てゐることにも驚いた
が起きた時にいつたことについても驚いたぞ

「…………起きなさい。八神君も起きてあげてくれませんか
？」

少し困り顔で言われても……

「えーと、起きてても無駄だと思ひます。前起きてみたら5分も
たたずに寝ました」

「何だと！？あつ、ス、スミマセン」

俺には何かないのか？

「なんやアイツ…………なにに来てん
ん？誰だらう？」

「帰ねや」

勝呂君か。まあ、燐に対しても仕方ないかな？
しかし気合入つてゐなあの髪。校則違反じゃないのか？

「つて、おこ！？燐！？なにせつこうた顔で寝てんだ！？」

「奥村ぐーん！しつかり！」

「…………チッ！」

なにいらっしゃしてんだあいつは？

対魔薬学

「それでは」の間の小テストを返します。志摩くん
「ほおい」

「私 自身あるよ！得意分野だもん」
「こいつは確かにこの前この塾に入った、杜山しえみだったか？燐の知り合いみたいだが？」

「やうなの？別にいいけど」

九城は他人にほとんど興味がないからな

「そういうや、お前なんで着物？」
学校でも見たことないし・・・

「杜山さん」

「は、はいっ」

「こいつ赤面症か？あ、なんかしょんぼりして帰つてきたな

「41点？でか、サンチョさんつて何だ？」
「ウネウネくん？何それ？」
「ぶつははー？得意分野なのになー！」
お前はどうなんだ？燐

「奥村くん」

頭かいて帰つてきたな。

「二点？凄いね君。いや今度遊ぼうよ」「みづみだよ！」

「他人のふりすんな！！そういう手前はどうなんだ！」

こんな点数の奴とは他人でいたいわ

「ん？ 87点だが？」

「私は83点」

「畜生！」

何か悪いか？ つーか年下に負けるって・・・

「勝臣くん」

「はい！」

おー、燐を睨んどる、睨んどる

「2点とか狙つてもようとれんわ 女とチャラチャラしこじゅからや
ムナクソ悪い・・・！」

『もつとも、』もつとも

「はー？」

はー？ はお前だ、燐。

「よく頑張りましたね、勝臣くん」

ドヤ顔で帰ってきたな・・・ウザイが今の燐の顔の方が鬱陶しい

「98点、すげーじゃん」

「ホントだよ」

ウザイがすごいな

「お前らも凄いやないか」
テレ顔で言つてゐるけど

「10点以上差つけられて言われてもなー」

「それもそやな」

「『』は否定するといじやないのかな？勝呂クン？」

「ばばかな、お前みたいな見たための奴が98点とれるはずが・・・
常識的に考えてありえねーよ」

人は見た目によらない。今の世の中じや普通だぜ？言葉にやださんか

「なんやと 僕はな祓魔師ヒガシシスターの資格得るために本氣で塾に勉強しに來
たんや！塾ヒガシシスターにおんのはみんな眞面目に祓魔師目指してはる人だけ
やお前みたいな意識低い奴目障りだからはよ出ていけ！－!
まともだなー、少なくとも燐より

「な、何の権限で言つてんだこのトサカ僕だつて一樣目指してんだ
よ！」

眞面目に授業受けてる権限じやね？しかも一応つて・・・

「お前おまえが授業まともに受けとるとこ見たことないしー」

「ぼ、坊ぼん 落ちついて」

「授業中ですよお、坊ぼん・・・」

えつと確かにこいつらは・・・子猫丸と志摩だつたか？そういや、い
つとも一緒に行動してるなこいつら

「こいつも寝とるやんか！－！」

「お、俺は実践派なんだ！体動かさないで覚えるの苦手なんだよー！」

「うんうん、正論だ・・・どんどん言つてやつて下さいね」

「ああ、まつたくもつて正論だ。もつと言つてやれ」

「口くち笑顔で言つ俺達

「だあッ

「お前らビッチの味方だ！－！」

「さてどうでしょつか・・おひと・・」
あつち(笑)

体育・実技

「アキラ キムラ...」

何せ二てんだあい一いざ?

「何あれ」

少し困り顔で出雲の問いに朴が答えたな

「はは・・・、坊もけつ速このこせらぬなあ。あの子」
「そつなのか? おつと

「しかしハ神君・・・あれ反則じゃないですか?」「あれがお兄ちゃんだから気にしない気にしない」「でもさすがにスケボーは・・・」

駄目なんて言われてないもん。つてあいつらホントに早いなー

「実践だつたら勝つたもん勝ちやあああーーー！」
！？燐を蹴りとばしたつ！？

「うわ!? 危ないわー! さちに当たつたらいつすんだー?」

「スケボー乗つ取る方が悪いわ！」

「なにやつてんだキミタチはア、死ぬ氣かネ！」

「違います！」

「転生したのに死にたかないよ！？」

「『J』の訓練は徒競走じゃない悪魔の動きに体を慣らす訓練だと
たでシヨウ！」

まつたくそのとおりだ。

はあ疲れた、つか喧嘩してるよあの一人。

「勝呂くん いつかに来ててくれタマヒ」

「？ はあ

なんであいつだけなんだ？ 燐もだろ？

「なんでアイツだけ？」

「さあ・・・・・」

「つーか何なんだアイツ・・・・」

お前もだろ、燐

「かんにんなあ、坊はああ見えてクソ真面目すぎて融通きかんとこ
あつてなあ、じつつい野望持つて入学しはつたから・・・・」

「野望？」

「坊はね、『サタン倒したい』 いうて祓魔師^{ヒクンシスター}を目指してはるんよ

あー、そりやあ無理だな・・・

「あつはははは・・・・笑うやう？」

「笑うは行き過ぎだけど、不可能な夢だな・・・理由もおやじへ『

青い夜』 だらうし・・・・

「不可能？ なんでだよ？ それに青い夜って何だよ？」

・・・ こいつ何にも知らないんだな

「はあ、だつて不可能だろ？ サタンはこの物質界^{アッシャー}に同等の物質がな

いだろ？それどころかほとんどは10秒持てばまだいい方だ・・・
まあ悪魔と人間のこのような奴は虚無界ゲヘナに行けるが別かもしけんが・
・・『青い夜』は力のある祓魔師エクソシストたちをサタンが自分の炎ちからで大量虐

殺したことだ。解つたか？

「お、おう・・・」

本当か？お、勝呂が帰ってきた

黒川のナニヤー（後書き）

長くなるので一回か二回に分けたこと願こます。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

黒つ寺のナニヤー（前書き）

どうじよひ、とあるが本格的に入ってきたりとは言つても何十話も後のことですけどね

では本文です

黒川寺のナセ

勝田SHIDE

「いいかい、勝田クン！」

なんでやーなんで俺だけなんやー?

「きみは成績優秀だし。基本教科の先生方は皆期待なさってるんだ

三

「はあ」

「あんまり問題は起こさない方が賢明だネ」

「・・・・・あのお・・・・」

「なんでぼくだけ注意なんですか?あいつら・・・奥村 燐と神木
八神やつて・・・」

「ん?八神君に至つては何にも注意する」とは、ないんだがネ」
な、なんでやー?きょとんとした顔で言こおつといふし

「スケボーに乗つてたやないですか!?」

「ん?誰が持ち込み禁止といつたんだネ?むしろ実践では車などで
逃げる事が多い。そういう点では彼は最優秀だネ」

た、たしかに・・・納得できたような・・・できんかったような・・・

「じゃ、じゃあ、奥村は・・・奥村 燐は・・・」

「ああ・・・彼は」

あいつは何も悪くないとは言わせんぞー

「一理事長(フレス卿)が特別に入学させた ワケあり生徒らし

い 君もあまり関わらん方が利口だ^三
特別やと・・・?

SHDEOUT

八神SIDE

何故こうなつた?

勝呂が帰つてきて・・・そつそれまでは良かつた・・・
先生が何かわけわからない・・・とゆうか完全にプライベート丸出
しで授業を中止して、それから勝呂が燐に喧嘩売つて、燐があつけ
なく断つてそれにキレた勝呂が今あそこにいると・・・

「お兄ちゃん！？」田がつづるになつてたよ！「おーい！戻つてこー^イ！」

「五月蠅い、いや止めなくて大丈夫かねあれ？」
「私は家族以外がどうなろうが知つたこいつじゃない・・・あつ！そ
うだそうだ、大事なこと忘れてた」
なんだ？とても悪い予感が・・・とゆうか巻き添えが増えたと喜ぶ
ような顔はもしかして・・・

「お母さんここに引つ越すつて

「はあつ！――！？」

「どうしたのあんたが叫ぶなんて？」
叫ばずにはいられるか・・・一大事だ・・・ここにつもつすうす解つて
入るだろ？が・・・

「お母さんがここに引つ越すつて言つてゐるの。勤務先は日本支部本
部らしいよ」

「……あんたらも大変ね……あんな子離れできない母親を持つと
いや出雲にも結構、だきついていたぞ？」いつも顔色悪くなつてき
ているし……

「ど、どひしたの？出雲ちゃん、八神君、九城ちゃん？」

戸惑つて聞いてくるな朴俺らは今睡眠の危機に陥つてゐるんだ……

「後で説明する……（ガクガク）

「お願ひ、聞かないで朴……（ガクガク）

「大げさだなー、二人とも」

「解つた、今は聞かないでおいとくよ……」（九城ちゃんは喜んでるけど、一人はおびえてる？じやあおばさん関係かな？じやあ聞かない方がいいね……）

「……俺は」「俺は…」

お、始まつたか。そうだ今を生きよつて未来じゃなくて今を大切に
しよう！

「サタンを倒す」

覚悟を決めたような顔で言つてゐるが難しい夢だな、悪魔の子でもなければ……そういえば、噂で悪魔の子が多く所属する部隊がロシアにあると聞いたことが……

「ブツ プハハハハハハ、ちよ……サタンを倒すとか！あははは
！子供じやあるまいし」

現実逃避のように笑う出雲だが声だけ聞けば侮辱するよつて聞こえ
るなこれは……

「おー！出雲！？今まで心が揺さぶられたらどひするんだー？」

「あつ」

今気がついたかのよつていつうなー!?

「ゲボオオオオオオ」ボムツ

!/? 燐? 何でそこに燐が居るんだ? いやなんで食われているんだ!?

「おー!」

「きやああ

「燐!」

あやああじやねえぞ出雲ー? お前があれの引き金じやあねえか!?

あ? どうなつてんだ? リーパーが離れていく?

「・・・なにやつてんだ・・・バカかてめーはー!..」

「いいか? よーく聞け!」

なにがどうなつてんだ? ああ、バカ神めなにが『原作知識消しとくねー』だ!? その代わりにとあるの知識をくれたけどよ! 今の状況が解らん!

「サタンを倒すのはこの俺だ! ! ! ! めーはあつ! じとでろー!」

は!?

え、ちょ、えー!? あいつ俺の話聞いてたのか? 悪魔の子でもなけば不可能だと言ったのに・・・

あいつのばか者は鳥レベルか? はあ、あいつらあつちでギヤーギヤー騒ぎ始めたし・・・

「遅くなりました」

夜の鉄塔に一人と一匹の悪魔がいた

「久しぶりだなアマイモン “地の王” よ

「ハイ・・・お久しぶりです兄上」

地の王 アマイモン、世界各地で悪魔もしくは神ウコヘルとして恐れられ、
崇められる悪魔。余談だが相対する天使は神の火である。

「して、父上のお答えは?」

「・・・・父上は兄上の申し出を受けると

能面のよつな無表情で言つアマイモン

「・・・ほお・・・それは大変結構」

その応答に何かを企んでるかのよつに笑うメフィスト

「では父上には「我らの小さな末の弟は私の羽の下ですくすく育つ
てある万事うまくいく」とお伝えしてくれ」

「解りました・・・・兄上は実家には戻らないのですか?」

「行け。父上をお待たせするな」

「・・・ハイ」

追いたてるよつにアマイモンを返したメフィストは

「・・・フフフ戻らないとも、私のよつな放蕩者のとつてはこんな
愉快な玩具箱はないからな。楽しいお遊戯はこれからだ」

夜景を一望しながらいつつい放つたのだった。

八神SIDE

気持ち悪い

燐が眞面目に勉強しようとしたり、勝田が燐に親切だつたり……

「先生、今日もう帰つていいですか？」

「気持ちちは解りますが駄目です」

苦笑いで奥村先生が言つが、

「こんな気持ち悪い空間にもつとこらとーー?」

「すみません、そうです」

酷い・・・

ひへ、寒気が

SHDEOUT

祟り寺のナニヤー（後書き）

書き終わりました。

本文で書いたロシアの悪魔の子が多く所属する部隊は『殲滅白軍』の事です。後で出てくるかもしません。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

友千鳥やのー（前書き）

ハ神と九城の母親の事がちょいと出でますが。
子離れできないをなんて言つんでしょう？

これから漫画での一話を一・二・三話にして書いていきたいと思ひます

では本文です。

友千鳥その一

SIDE OFF

「今日こそ……絶対……お友達をつくる……。」

ながら言うしえみだが
祓魔塾に行く扉の前で何か決心を固めたような顔でブルブルふるえ

「今田さんとあこがれがあるんだ。頑張るー。」

今までちゃんとあいさつしなかったのかどうな」と、あいさつしたぐらいで友達できれば世の中は苦労しない

見ててね、おはあちせん・・・・！」

そへ言したから廻をぐぐいでいくしえみ
そして出雲と木に廻下て

「……」わツ、ちんこりん、うるさい。

なせかあしさ一するたにと盛大に轉じ
えられひへくりした一人に振りか

• • • • • • • •

大丈夫！？」「めん……ちよこと出雲ちゃん

かけって行つた

しえみはそのことに・・・とゆづかあいさつだけで転んだことに顔を真っ赤にしていた

「しえみ。何やつてんだそんなところで・・・」

「んなもん、転んで顔真っ赤にして放心してるだけだろ」

その時、間が悪いとゆうか、何とゆうか、燐と八神が入って来て、燐はしえみのわけのわからない行動？について思ったことをそのまま口に出し、そして八神は的確に現状を説明た

「・・・燐」

「俺はいない事になつているのか？」

しえみは燐の名前だけいい、そのことに首をかしげる八神

「な・・・なんでもない・・・！」

「無視かい」

「ドンマイ」

八神の言葉を聞き忘れたのか、ただテンパつてるだけなのか無視してなんでもないと言いながら塾に向かうしえみ

祓魔塾の教室

「夏休みまで一ヶ月半切りましたが、夏休み前には今年度の候補生エクスワイヤ認定試験があります。候補生エクスワイヤになるとより高度な訓練が待つていてため試験はそうたやすくありません。もし合格した場合夏休みは任務にあたつてもらいます」

「「なつ！－！－？え？ひ、里帰りできないんですか！？」」

雪男の最後の言葉に八神と出雲は驚き、顔がひくついていた

「はい。そうですがどうしたんですか？」

「『愁傷様。いえお母さんがここに引っ越すと言つていてそれを防ぐための最後の・・・とゆうかそれしなかつたら確實に引っ越すんですよ。うちの母は』」

雪男は里帰りできない事を固定し、九城は満面の笑みで「」愁傷様といい首をかしげている人たちに説明をした

「・・・もしかしてあなた達のお母さんは神木 碎さんですか？」
「どうして知ってるんですか？うちの母の名前を？」

なぜか雪男は久城達の母親の名を言いあて、それに九城は首をかしげ八神と出雲は名前を聞きガタガタ震え始めた

「いえ、私達が候補生（ホウブイ生）だった時の教師だったんですよ。銃器の・・・」

「へえー、どんな授業だったなんですか？」

「脱線してしまいますからそれはおいおい話すとします」

雪男の言葉には九城も驚き授業内容を聞こうとしたが脱線してしまったため、おいおい話すと言いながら一人がおびえる理由を理解したようだ

「まあ、候補生（ホウブイ生）になるための強化合宿を来週一週間行います。強化合宿に参加するかしないかと・・・所得希望の“称号”をこの用紙に記入して月曜までに提出してください・・・」

一通りの説明をして用紙を配る雪男。そしてよつやく現実世界に戻り始めた八神と出雲

「“称号”つて何だ？教えくれ・・・オネガイシマス」
「あ！？」

燐の質問に思わず叫んでしまった八神

「どないしたんや、八神」

「ぼ・・・勝呂、燐がバカだ。あほだ」

「おまん今、坊つて言おうとしなかつたか？それに奥村がバカなこ

とは今に始まつた事じやないか

八神の叫んだのを聞いてやつてきた勝呂を八神は坊^{ぼん}と言おつとしたんじやないかと聞き、さらに馬鹿なのは今に始まつた事じやないと言つ

「そりやあ、そうだが、『“称号”^{マイスター}』ってなんだ』って聞いてきやがつた

「・・・こいつは本当に祓魔師^{エクソシスト}を田指しとるんか?」

八神は燐が聞いてきたことを言い、勝呂は本当に田指しているのかといぬかみに血管を浮かび上がらせながら聞いた

「ははは、奥村くんてほんに何も知らんよなあ」

「な・・・何なんだよクソ・・・世の中にはそんな人もいるんだよ・・・」

志摩は燐が何にも知らないと言つと、燐は否定もせず固定した

「“称号”^{マイスター}」

「「子猫丸！教えるなー（おしえんでええしー。）」」

「こねこまるー?」

八神と勝呂の言葉を無視して説明する子猫丸

「なんとなく解つた。ありがとなこねこまる。お前らは何取るの?」

「何シレッヒと馴染んどるんやオイ!」

子猫丸が説明し終わりみんなは何をとるのかを聞き始め、勝呂はなぜかイライラし始め、それからは全員がなんやかんやで所得志望の“称号”を言つ事になつた

「前回は使い魔を出せるものに出してもらつた。今回は手本を見せる、そして全員に悪魔を召喚できる才能があるかをテストする」ネイガウスがそう言いながら魔法円を書いた

「図は踏むな、魔法円が破綻すると効果は無効になる。そして召喚には己の血と適切な呼びかけが必要だ」

そう言いながらネイガウスは包帯が巻かれ血がにじみ出ている腕を出し、呼びかけた

「“テュポエウスとエキドナの息子よ” “求めに応じ” “出でよ”」
言い終わると魔法円から異臭をまき散らしながら屍番犬ナベジウスが出てきた
「先ほど配つたこの魔法円の略図を施した紙に自分の血を垂らして
思い付く言葉を唱えてみろ」

ネイガウスの説明が終わるやいなや出雲は白狐を一体呼び出した

「白狐を一体も・・・見事だ神木出雲」

白狐、狐妖怪の中では善孤ゼンコに分類される。古いものになると人語も理解すると言つがしかし

「“千里眼により全てのことを見透かし” “私との契約を思い出し
” “未廣大神としての力を今ここに振るわん”」

八神は尾が四本ある善孤、天狐を一体呼びだし、その天狐は八神の足元で伏せた

「て、天狐を呼び出しただと？いや素晴らしいぞハ神」

ネイガウスは動搖しながら称賛をしたが、大半の生徒は何が素晴らしいのかを理解できずに首をかしげていた

「天孤は1000年生きた善孤がなる強力な神使なのよ、一部では神と同一視されてる所があるほどにね」

天孤のことを説明する出雲。たしかに今この世界で天孤を呼びだせ従わせる事のできるのは数えるほどしかおらず、八神ほどの年齢となると皆無に等しかつた

「実はもう一休呼び出せますけど疲れますからやめていいですか?」「あ、ああ。良いぞこれはあくまで才能があるかのテストだしな。実際お前たちはする必要がないんだ」
たしかに前の時間で使い魔を呼び出したため呼び出す必要がなかつたといつ

「“私の言葉に迷い” “お前の姿に戸惑い” “その力は防げない” “出でよ”」

その言葉と同時に水の狼が出てきたがハ神と出雲は眉をひそめた
「それは・・・水虎の一種か?」
ネイガウスもこの使い魔は初めて見たようで何かは良く解つていな
いようだ

「ええ、多分。初めてやつてみましたし・・・ね?牙狼」

今回初めて出してみたからわからないと言つ九城

「化け狸はどうした?」

九城が出せる使い魔の大半が化け狸でそれを出さなかつた事を疑問に思つたようで聞いてきた

「いや、夢でこの言葉を聞いてさ、試したくなつたの」

言外に昨日神が夢に出てきたとゆう九城

「そりゃ、解つた」

そしてその意味を理解した八神は適当に答えた

ちなみにこのやり取りの間にしえみが緑男グリーンマンの幼生をだしたり、他の奴らが紙に穴が開くかとゆうほど魔法円の略図を見ていた

友千鳥のー（後書き）

どうでしたか？

天孤の知識はウィキで調べました。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております

友千鳥やのー（前書き）

昨日投稿できませんでした、すみません。
友千鳥はこの話で終わると思います。

では、本文です。

友千鳥その二

SIDE OFF

「それは、緑男の幼生だな。素晴らしいぞ杜山しえみ」
クリーンマン

卷二

緑男が鳴き声をあげ、そのあとしえみの頬に頬ずりをした

「ねえ、神木さん・・・ビツ！？」

最後の方がおかしくなっているのは神木さんか全員
振り向いたからだ。

「どれだ、せめて下の名前で呼んでくれ」

下の名前で呼んでくれという八神に対してもしえみは謝った

「え、えっとね。私も使い魔、出せたよ！」

神木家の三人組はしえみが使い魔を出せたことを『それが』で済ま

世たる事の二三の言葉

「・・・今年は手騎士候補が豊作のようだな、悪魔を操つて戦う手

騎士は祓魔師の中でも数が少なく貴重な存在だ「

今年の豊作、ふりにかなり驚いているネイガウス、それからしばらく使い魔の説明をして授業が終わった

「神木さん！」

「「「だから、下の名前で呼べって言つてるだらうが……」「」」

廊下で神木と懲りずに呼ぶしえみ

「おーい！おーい！」

「「「「「何で私につきまとつてのよー使い魔は自信をえあれば誰でも出せるものなのに！……」「」」

と、まあいさかずれているが出雲がつきまとつ理由を聞いた

「えっと、あの・・・あの・・・」

何かを言おうとするしえみだが意外に短気な出雲と八神はこめかみに血管を浮かばせ始めていて、おおらかな九城でさえ、今にもどつかに行きそうな顔をしていた

「わ、私と、おおとお友達になつてくださいー！」

「「今はそれどころじゃない！……」「」」

「いいよ」

即答で出雲と八神は今はそれどころじゃないといい、九城はいいよと言つた。

あまりの事に朴でさえポカーンとしていた。

「わ、私・・・友達いたこと無くつて・・・」
しえみが続きを言つたが出雲と八神は次の授業にいそいそと出でいつた

「い、出雲ちゃん！？八神君！？まだしえみちゃんが話しているよ

！」

「話なら断つた、時間の無駄だ」

「同じくちも同じよ」

朴は二人を止めようとしたが聞く気なんかさらさらないと黙つて一人に、予想していたのか苦笑いをする朴

「あ、あの、しえみちゃん？ 私で良かつたら友達になるよ～あの一人、いろいろあるからそのあとにした方が・・・」

「え？ あ、ありがとう！」

朴は自分で良ければ友達になると言い、しえみは喜んだ。

ちなみに九城は餓狼で遊んでいた

それからしえみと朴はしえみがいささかぎこちないが、いたつて普通の交友関係があつた

夜 旧高等部男子寮

「しえみにも友達ができるみたいだな」

「え？」

この寮の住人である奥村兄弟が雑談していた。どうもこの寮にはこの一人しかおらずいろいろ都合がいいらしい

それからしばらくして

「うわなんや「レ 幽霊ホテルみたいや！」

志摩がいきなり失礼なことを言い放つたが、何せ壁にはひびがあり、全体的に黒ずんでいるため仕方ないことだった。

「おはよ〜りやります、では中に案内します」
志摩の言葉を予想でもしていたのか中を案内すると黙つて靈男

「……はい、終了」

強化合宿の内容の一つであるプリントをしていた訓練生達ペイジ

「プリントを裏にして回してください」

雪男がプリントを回していくださいといい、そして明日の事を説明し始めた

「ちよ・・・ちょっとボク夜風にあたつてくる」

「ねつ、冷やしてこい・・・」

燐が知恵熱を出し勝田の言葉を聞きとれたかさえ分から無い様子で外に出ていった

「朴、お風呂入りにいこつ」

「うん、しえみちゃんも入る?」

「うん!私も入る!」

朴の言葉に出雲は少し顔をしかめたが、過去に八神の交友関係に口を出してボコボコにされたことがあったため何も言わなかつた

ちなみに九城は母親の凄まじい抵抗があつたため来た時には八神におぶられてきていて、今も寝ていた

「うはは、女子風呂か~、ええな~。こりゃ覗いとかな あかんのやないんですかね。合宿つてそつゆうお楽しみ付きもんでしょ」

「志摩!…お前、仮にも坊主やろ!」

「また、志摩さんの悪いクセや」

「白狐に噛み殺されるからやめとけ」

志摩を止めようとする勝田と子猫丸だがハ神は止めようとする雰囲気ではなく、過去にあった事を言つよつた雰囲気で言つた

「また、また、可愛い従妹の裸を見られたくないだけでしょう？」

顔が青くなりながら言つ志摩だがハ神はため息をつき「いつ言つた

「過去のそういう奴がいてな、母さんにそいつの親が勤めている会社を潰されその後の人生を・・・一家心中だったか？」

とんでもないことを大マジの顔で言つたハ神にここにいた全員がこう決心した

(これから、この二人にかかる時はあまり変なことをしないようにしてよつ)

風呂場

「お風呂場はまだ綺麗で安心したわ、どこもかしこもオバケ屋敷みたいなんだもん」

「うん」

出雲はひとり言を言いながら愚痴り、それに満面の笑みで相槌をするしえみだが一人暗い表情の朴

「あのね、出雲ちゃん、しえみちゃん？」

「なに?朴」

「なに?朴さん」

何かをきりだそつとする朴

「私、塾はやめよつと思つ

「え・・・」

あまりの事に驚く出雲だがしえみは何となくわかつていたのか残念
そうな顔をしていたもののうなずいた

それから朴はやめる理由を話したが出雲はそれでも引き留めようと
したが

天井から何かが、黒い何かが落ちてきた。

そして三人は天井を見ると屍系の何かがいた

「「「あやああああ」」」

廊下

「！？今のは・・・」

「叫び声だな・・・風呂場から聞こえてきたからおやりへ出雲達だ
る」

雪男が叫び声を聞こえたのか驚いたが、たまたま同じ場所にいた八
神が落ち着いて現状を説明した

「俺は一応見に行く、先生は銃を持っていますか？」

「はい、私も助けに行きます」

八神が異様に落ち着いているのに少し疑問を雪男が持つたが、今は
それどころではないため走つて風呂場に走ることにした

「おい、あれは・・・燐か？」

「クソ！何で兄さんが・・・」

風呂場

「“稻荷の神に恐み恐み白”」

“ガール”

朴は屍系の魔障をうけ倒れておりそれを今しえみがアロエで応急処置をし、それを邪魔されないために出雲は白狐を出そうとしたが

「おらあああ！」

燐が屍ナベリウス、おそらく屍番犬ナベリウスを殴り、それに驚き白狐が出せなかつた

「兄さん！」

そして雪男が入ってきてバババババンと屍番犬に銃を撃ち、屍番犬ナベリウス

は出でいつた

それからはしえみの処置が正しいと雪男がほめ、気がついた朴はしえみに礼を言った。ちなみに燐はハ神に引っ張られて風呂場から出ていった。

友千鳥のー（後書き）

うーん、多分めちゃくちゃ解りにくかったと思います。
そういうのは感想の悪い所に書いてくれると嬉しいです。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者あつやのー（前書き）

最近投稿できませんでした。すみません
久しぶりに神が出てきます。

では本文です。

此に病める者ありその一

SHDEOFF

神の空間

「アベシ」

いきなり碁バトル漫画のやられたような奇声をあげながら蹴り飛ばされたのは、神であった。

「いきなり何すんだよ！私は見てくれのとうり、か弱い少女だよ！（年齢はウン億歳だけど」

「黙れ。俺を殺した奴が何を言つ

神を蹴り飛ばしたのは神木ハ神。実は転生してからもちょくちょく神と話していたのだが、そのたびにまずは蹴り飛ばすのがハ神であつた。

「で、今日は何の用だ？九城にはもう行つたんだろう？さつと話せ

「あ、うん。実はね。原作ブレイク開始するわ」

衝撃の（笑劇？）発言であった。

「できないつたのは誰だつたか？」

顔を引くつかせながら、問いかけるハ神。

「あ、うん。それはね」

「それは？」

もつたいぶる神にこうして欲しいんだろうなと、めんべくせうつて繰り返すハ神

「君たち原作知識消したし、いくりブレイクしようが自覚ないじゃん」

元も子も無い、身も蓋も無い。八神はあきれて声も出なかつた。

「あはははー！どう？衝撃の事実は。つーか、キミタチ転生させるだけで原作ブレイクだつづーの」

自分で言つたことに、大爆笑する神だが、八神は肩をプルプルふるわせ

「じゃあ、何だ！あのイギリス清教とか、ロシア正教とか、ローマ聖教とかも原作にはないのか！？」

「もちろん」

どうも神は原作どうりにする気なんぞ端からなかつたらしく。いろいろ要らん設定をブチ込んだこと

「ふつざけんなー！！！」

「おつと時間だ。じゃあねー、また今度とか」

ポチッとボタンを押しハ神のいた所に穴があき、八神を退場させる神

「Hの魔法円の抜けている部分を前に出て描いてもらひ。・・・神

木出雲」

時は変わつて祓魔塾。今は魔法円・印章術の授業中で、ネイガウスが出雲を指名したが出雲は答えずについた。

「神木出雲ー」

「！！」

それに気がついたネイガウスがもう一度呼び、それでようやく出雲は気がついたようで、自分でも信じられないという顔をしていた。

聖書・経典暗唱術

「悪魔の大半は、“致死節”という、死の理・・・必ず死に至る言や文節を持つているで」ザマースエクソシスト

そう言っているのは、本当に祓魔師か?といつほどの太っている、教師であった。

「では、宿題に出した。“詩編の第30篇”を暗唱してもいいで」ザマース。では出雲わん。お願ひするで」ザマース

「はい！」

そう勢いよく答えた出雲であったが完璧に暗唱することができず、周りも珍しいとこうよくな顔で見ていた。

そして次にあてられた勝負は完璧に暗唱し、まわりは儲しみない拍手をした。

此に病める者あつその一（後書き）

授業らへんには八神や九城が全く出てきませんでした。
次の話には必ず出します。

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。

此に病める者ありやのー（前書き）

よしー！嫌いな戦闘シーンは次話に持ち越しだ！

皆さんすみません適当で・・・

ですが必ず次話で戦闘シーンは書きます！

では本文です。

此にて病める者あつやー

SHDEOFF

祓魔塾

「いや。でもあれだけの文節を苦も無く暗唱するなんて、お前凄いな」

聖書・教典暗唱術の授業が終わり、燐・しえみ・八神・九城の四人は京都三人組の周りにいた。

「お前本当に頭良かつたんだな」

燐が勝呂を珍しく称賛したがハ神は即答で

「お前より頭が悪い奴は、小学校行つても珍しい」

「そやな」

燐の馬鹿さを小学校に合わせても珍しいと言いつ、それに勝呂も賛同した。

「な、なにー！そりやあ、小学校の時も結構サボつてたけど（ヨニヨゴニヨ）」

燐は中学だけではなく小学校までサボつていたらしい。

「すゞいねえ、勝呂くん…びっくりしちゃった」

しえみが改めて勝呂をほめたが

「いやいや、惚れたらあかんえ？ええけど

おそらく冗談であろうが、お角違いなことを言つた。

ちなみに勝呂が言った、詩編の第二十一篇はいつであった。

“神よ、我汝をあがめん。

汝我をおこして、我が仇の我」とことひつて、喜ぶをゆるし給わざれなり。

我が神よ、我汝によばわれば我汝をいやし給えり。

神よ我汝が魂を陰府より救い、我をながらしめて、墓に下らせ給わざつキ。

神の聖徒よ、神をほめうたえ、清き名に感謝せよ。

その怒はただしばしにて、その恵は命とともに流し。

我ひたすら神に願えり。

我、墓に下らば、我が血なにの益あらん。

塵は、黙すことなからんためなり。

我神よ、我、永遠に汝に感謝せん。

”

と語つよつな長つたらじい文節を読んだが、これを現代語訳にするといひだ。

主よ、わたしはあなたをあがめます。

あなたはわたしを引き上げ、

敵がわたしの事によつて喜ぶのを、
ゆるされなかつたからです。

わが神、主よ、

わたしがあなたにむかつて助けを叫び求めると、
あなたはわたしをいやしてくださいました。

主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、
墓に下る者のうちから、

わたしを生き返らせてくださいました。

主の聖徒よ、主をほめうたい、
その聖なるみ名に感謝せよ。

その怒りはただつかのまで、

その恵みはいのちのかぎり長いからである。

夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る。

わたしは「彼らかな時に誓つた、

「わたしは決して動かされぬ」とはない」と。

主よ、あなたは恵みをもつて、
わたしをゆるがない山のようこ堅くされました。
あなたがみ顔をかくされたので、
わたしはねおじ惑ひました。

主よ、わたしはあなたに呼ばわりました。
ひたすら主に請い願いました、

「わたしが墓にて下るならば、
わたしの死になんの益があるでしょうか。
ちりはあなたをほめたたえるでしょうか。
あなたのまことをのべ伝えるでしょうか。

主よ、聞いてください、わたしをあわれんでください。
主よ、わたしの助けとなつてください」と。

あなたはわたしのために、嘆きを踊りにかえ、
荒布を解き、喜びをわたしの帶とされました。

これはわたしの魂があなたをほめたたえて、

口をつぐむことのないためです。

わが神、主よ、

わたしはとこしえにあなたに感謝します。

これとさつき勝田が言つたのでは、どっちが効果があると問われれば、それは同じである。

形は違えど意味は同じ。悪魔にとっては、形より中身の方が、効果的であり苦痛であるためである。

「暗記なんて、ただの付け焼刃じゃない!」

出雲が侮辱したように・・・否、自虐的にと言つた方がいいだろう。少なくとも八神と九城にはそう聞こえた。

「あ?・・・なんか言つたか。『リラ』

「坊・・・」

先ほどまで褒められていたから・・・では無く、先ほどの言葉は、
詠唱騎士アリアにとつては侮辱のようないい言葉であつたため、勝田は出雲に突つかかつた。

「暗記なんて・・・、本当の学力と関係ないって言つたのよ・・・！」

「はあ? 四行も覚えられん奴に言われたことやないわ

今にも喧嘩になりそうな不穏な空氣。そんな中、子猫丸は仲裁に入つたが意味も無く

「あたしは覚えられないじゃない! 覚えないのよ!...」
詠唱騎士アリア て・・・詠唱中は無防備だから班パーティに、お守りしてもらわなきゃならないし。ただのお荷物じゃない!」

出雲の言つたことに、八神と九城は、やれやれとしていた。

「なんやどお・・・？詠唱騎士田^{アリア}指しとる人に向かつてなんや！」

「坊！」

勝呂は立ち上がり、ドスドスと出雲の方に向かつて行つた。

「なによ！暴力で解決？ゴッワ～イ。さすがゴリラ顔ね！殴りたきや、ホラ。殴りなさいよ！」

それに拍車をかけるように、挑発する出雲。

「～～～～！～～～～代替俺はお前が気にくわへんねや！人の夢を笑うな！～～」

ドンッ！と燐の座つている机を叩きながら言つ勝呂。

「ああ・・。あの「サタンを倒す」つてやつ？・・・はッ。あんな冗談笑う以外に、どうしろつてのよ！」

たしかにサタンを倒すという夢は、常人（祓魔師がこれに入るかは不明だが）には不可能極まりない夢であった。

「じゃあ、何や。お前は・・・。何が目的で祓魔師なりたいんや・・・あ？言つてみ！～」

「目的・・・？」

出雲の脳裏に・・・そして、八神と九城の脳裏に広がった光景は、地獄。この世にそんなものがあるなら、そう言つのが一番と言つべき光景であった。

「・・・・・・・・・あたしは、他人に目的を話した事はないの！あんたみたいな、目立ちたがりと、ちがつてね・・・！」

「」

出雲の言葉に、とうとう勝呂がキレ、胸倉をつかんだが、出雲が思わずと言つた感じで手が出て、それが止めようとした燐に当たり、さらに授業をしに来た雪男に見つかった。

此に病める者あつやのー（後書き）

詩編の第三十一篇はネットで調べました。
くどいようですが次話で必ず戦闘シーンは書きます。
ではまた明後日。

此に病める者あつやの二（前書き）

此に病める者あつは、今話で完結です。
次話からはオリジナル要素が強くなります。

では本文です。

此に病める者ありその二

SHDEOFF

正十字学園 高等部旧男子寮

「眞さん。少しば反省しましたか」

雪男が塾に居合わせた者達に問い合わせただした。

しかし、塾生たちの膝の上には**磯石**が乗つており、うめき声をあげていた。

「な・・・なんで俺らまで」

燐が雪男に聞いたが

「連帯責任つてやつです」

一、二言で一掃された

「この合宿の目的は、“学力強化”ともう一つ、“塾生同士の交友を深める”っていうものもあるんですよ」

「こんな奴らと、馴れ合いなんてゴメンよ・・・！」

「コイツ・・・！」

雪男の説明を無視して、また燐を間に言い争いをしようとする出雲と勝田。

「馴れ合つてもらわなければ困る。**祓魔師**は、一人では戦えない！」

そう、**祓魔師**は、集団戦法が定石。例外はあるものの、それでも例外は例外。この場のほぼすべての存在にとつては集団戦法は必須であった。

「お互の特性を活かし、欠点を補い。一人以上の班で闘うのが基

本です。実践中になれば、戦闘中の仲間割れは、こんな罰とは比べ物にならない連帯責任を負わされることになる。そこをよく考えてください」「

雪男が改め説明すると、さすがに出雲は口をつぐんだ。

「……では僕は、今から三時間ほど小さな任務で外します」「……？」

雪男が席を外すと云いつと、何を期待しているのか燐が反応した。

「……ですが昨日の屍の件もあるので、念のためこの寮全ての外につながる出入り口に、施錠し。強力な魔除けを施しておきます」「施錠つて……、俺らどうやって出るんスか」

雪男の言葉に勝呂が問いただした。

「出る必要はない。僕が戻るまで三時間、皆で仲良く頭を冷やしてください」

鬼だ。この場にいた全員がそう思つよつた言葉であった。

ちなみに轡石バリヨンは、持つていればいるほどだんだん重くなる性質がある。つまり三時間も持つていればどうなるかは、予想がつくであろう

「つーか、誰かさんのせいでエラいめえや」

「は？あんただつて、あたしの胸ぐらつかんだでしょ！？信じらんない！」

また、出雲と勝呂が、燐を挟み口喧嘩を始めようとした時

「一灰は灰に（Ash To Dust）—塵は塵に（Dust To Dust）—吸血殺しの紅十字（Squeamish Bloody Road）」

八神がルーンカードを撒き散らし、詠唱をし炎剣を呼び出して、八神、子猫丸、志摩、燐、しえみ、九城、宝、山田の上に乗っていた

「轟石^{バリヨン}を焼き拵つた。」

「おおー！ありがとうな、八神君」

「おおきに、八神君」

「すつづーー！お前そんなことも出来たのか！」

「すごいねー。ねー、二一ちゃん」

「二ーー！」

と解放された者たちは口々に、八神に礼を言つたが

「ちょ、あんた！なんでそいつらだけなのーー？」

「そやでー！俺はどなするねんーー！」

解放されなかつた、二人は文句を言つたが

「少しは頭冷やしてろ」

八神はそれを一掃した上に

「そやね。坊は少し頭冷やしていたほうがいいさかいね」

「ん。出雲ちゃんは少し頭冷やしてな」

子猫丸、九城に頭冷やしてろと言われ、とうとう黙る二人だが

フツと電気が消えた。

「ーー？」

皆が驚きあわてふためく中で、志摩が携帯を開き明かりを確保した。それにならい皆が携帯を開いていった。

「あ…あの先生。電気まで消していくはったんかーー？」

「まさかそんな・・・」

先ほどの事もあり、半ばありそつた事を言ひ勝田

「停電。」

そう考えるのが妥当だ。何せ電気が付いているのはこの部屋だけ、これでブレイカ　が落ちるわけも無かつた。

「いや窓の外は明かりがついている」

卷之三

たしかに窓の外の建物は明かりがあつた

「停電は、この建物だけでことか？？」
燐が言った事は、日本では至極珍しい事ではあつたが、そう考えるのも無理は無かつた。

「廊下に出でぬよ」

「志摩さん。気イつけてナ」

志摩が廊下に出てみよつとし、氣をつけてといふ子猫丸

「フフフ。俺こういうハプニング、ワクワクする性質なんよ。リア

志摩が扉を開けると、そこには継続せだらけの顔らしきものがあつた。

「・・・なんやろ。日ヒ悪なつたかな・・・」

「現実や現実！－！－！－！」

認めたくない事を言つていた。

そして扉をブチ破り中に入ってきた、悪魔。

そしてうめき声を上げながら訓練生を見た。
ペイジ

「昨日の屍^{グール}・・・！」

「・・・・・！」

出雲が昨日の屍^{グール}だと叫び、なぜか燐が反応した。

「ヒイイ。魔除けはつたんやなかつたん！？でか・・・足しごれて動けな・・・」

勝呂は普通に絶叫していた。

しかし、屍^{グール}は、そんな事などお構いなしに、一つある顔（？）うちの一つが膨れ上がり、破裂した。

「つー？」

そんな中、しえみは

「二ーちゃん・・・！ウナウナくんを出せる」
また謎のフレーズを言い、緑男の幼生は何かの木を出し、即席のバリケードを築いた。

「・・・あれ？・・・ぐらぐらする・・・

「しえみ！？」

「ゲホ」

「あ、熱い」

皆がなぜか、風邪のような症状を訴え始めた。

「屍^{グール}の魔症のせいだ。お前大丈夫なのか？驚いたな・・・馬鹿には魔症さえ聞かないとは・・・」

ハ神が燐に説明し、疑問を口にした後、勝手に理解したようにうなずいた。

「杜山さんのおかげで助かつたが・・・使い魔は基本的に精神や体

力を削るんだ……こいつの体力がついたらもうお終いだ」
ハ神が不自然なほどに冷静に現状を説明した。

「え？ ハ神君。君がさつき、つこうた炎剣で倒せへんの？」
たしかに、魔の五大元素によると、腐の王の眷属は火に弱い事になつてゐるが

「無理だ。今のカード枚数では中級悪魔を二体も倒せる火力は無い。
そもそもそんなことをしたら、このバリケードが燃え上がる……。
いや・・・時間稼ぎ程度ならできるかもな・・・」

ハ神がブツブツ独り言を言い出し、その間に燐が
「俺が外に出て囮になる。一匹ともうまく俺について来たら何とか
逃げる。・・・ついて来なかつたら、どうにか助け呼べねーか、明
るくできねーかとかやってみるわ」

「はア！ ？ 何言つとるん！ ？ ・・・・バ・・・バ力！ ？」

燐が無謀なことを言い、勝呂が燐を、止めようとしたが無視をして
バリケードの中（人一人が通るほどの隙間はある）にはいていった。
そして、一匹の「ひり一匹だけが燐についていった。

「おい、勝呂達はとにかく詠唱で倒せ。俺はこのバリケードが消えた時のために炎のバリケードの準備をする。九城は、化け狸を出して足止めをしている。出雲は、もし出せるなら白狐を出せ。解つたな」

ハ神が考えがまとまつたのか各自に指示を出した。

「つー？」

その指示に絶句する出雲。何せ彼女は今、精神がとても不安定で使
い魔に逆に襲われる危険性があつたのだから……

「ハ神君……でもアイツの“致死節”知らんでしょ！ ？」

「屍系の魔は……『ハネの福音書』に致死節が集中しとする
八神の指示に、志摩が異論を唱えたが、それに答えたのは勝臣ヒヂロであ
つた。

「俺はもつ、丸暗記しとるから……全部詠唱すればどつかに当た
るやひ！」

「全部？一十章以上ありますよー…？」

「…十一章です…」

子猫丸が言つた、二十一章。この話は前話に出てきた、詩編の第
三十篇を単純計算で二十一回唱えるようなものであった。

「子猫さん！」

「僕は一章から十章まで暗記してます。…手伝わせてください

い」

「子猫丸！頼むわ…！いいよな、八神」

「ああ、むしろ願つたりだ」

子猫丸も言つといい、八神は壁にルーンカードを輪のように貼りな
がら、ありがたいと言つた。

「ねえ、風邪の私に働けと…？」

「当たり前だ。三体でいいから出せ」

九城は八神に言われていやいや詠唱した。

“そなたは何を望む！そなたは何を欲す！厚かましき者よ”

すると三体の化け狸が出てきた。

「なんですか？あの屍ゲールは？」

「我らはあいつを倒せばいいのですか？主よ」

「ならば我らは期待にお答えしましょ。主よ」

出てきた化け狸は、順番に話してきた。

「ああ、うん。そうだね。あいつを倒すから力を貸せ」
すると、化け狸達は、バリケードに入つていき屍ゲイルに襲つて行つた。

「坊。じゃあ、俺は全く覚えとらんのでいざとなつたら援護します」
すると志摩は仕込んでいたのか、キリクを取り出した。

「子猫丸は一章めから、俺は十一章めから始める。つられるなよ!」

「はい!」

「いくえ」

そして、一人は詠唱を始め、八神はルーンカードを貼り終えたのか
一時的に休憩しており、九城は呪言じゅげんを言つたりして化け狸達を強化
したりしていた。そして、なにも出来ない、出雲は唇をかみしめて
いた。

“・・・心を騒がすな、神を信じまた、我を信せよ” “彼ひより
語るにあらず” “汝、汝ら導きて、真理をこと” “とく悟ごらしめん”
子猫丸はもうすでに詠唱をし終わり、勝臣はもつ最後の章に入つて
いた。

九城はもうすでに化け狸をしまい、銃に・・・機関銃に切り替えていた。

そして、とうとう、しえみが倒れた。

「杜山さん！」

そしてバリケードが消えたが、すぐにハ神がこいつ言った。

「“邪悪を罰する裁きの光なり、
冷たき闇を滅する凍える不幸なり。

その名は炎、
その力を使って我らを守り、我らの力になれ”」

すると、先ほど貼ったローンカードから火柱が上がり、炎の壁ができた。

「うおおおー！？何やコレー！？凄いなあーーー！」

「うわ！初めてやつたのにうまく行つた！？」

志摩がハ神をほめたがハ神は初めてやつたらしく、びっくりしていたが

「でもこの枚数はきつい・・・あと十数秒持つかどうかだ。あと四日で誕生日でこの、贊殿遮那を抜けたのに・・・」

贊殿遮那は、十六歳にならないと抜いてはならないという綻があつたのだった。

しかし、ハ神は今にも倒れそうなほどにふらふらであった。

「クソ！すまん。これ爆破させるわ！“起爆”！！！」

ハ神が起爆と言つと、炎の壁が屍ゲールに、爆風が襲つた。

「グロ、口、口、」

しかし、たいしたダメージにはならず

勝呂に一気に襲つて行つたが

「のやろオ・・・！」

「死体め！喰らえ！」

志摩のキリクと九城の機關銃によつて阻まれた。

「・・・ちょっと、あんた・・・ま・・・まさか死ん・・・！？」
いすもはしえみに駆けより、物騒なことを言おうとしたが、ちゃんと脈があり安心したようだ。

「う・・・かみ・・・き・・・さ・・・」

「し・・・しつかりしなさいよ

何かを伝えようとするとしえみ。

そして、

「・・・・、今日はいつもの神木さんじやない・・・だ、ね。大、
丈夫・・・？」

出雲はその言葉で吹つ切れたようで

「・・・・“稻荷神に恐み恐み由す・・・・！” “為す所の願いとして成就せずということなし！”

すると、白狐が出てき出雲を、チラつとみたが、たいして何も言わずに

「汝よ・・・何か用か？」

「あいつを倒す！行くわよ！」

白狐は出雲に従い、志摩と九城の猛攻を何とか抜け出した、^{グール}尻に向かつて行つた。

“ふるえゆらゆらとふるえ……”
すると、一匹の白狐は猛スピードで屍の周りを駆け廻った。

「神木さん……」

「やつた……!?」

だが、まだであった。

「……また、これを録しし者……”
この弟子……なり！」

勝呂をつかもうとする屍だが

“千里眼により全てのことを見透かし” “私との契約を思い出し
” “末廣大神としての力を今ここに振るわん”
八神の出した、天孤によつて阻まれた。

“我等は、その証の真なるを……知る”
その言葉と同時に電気がつき、天孤と闘つている屍グールが怯んだ。

「我おもうに世界も”
「グモ、オオオオオ」

勝呂の言葉に悲痛な声を上げる屍グール

“その録すところの書を載するに” “耐えやらん……”
その言葉と同時に屍グールは、一度も勝呂に触れることも出来ずに消え失せた。

「消えていいぞ。天孤」

「ほう……、天狐づかいの荒い事だ。
そう言いながらも消えていった、天孤。」

「今回は助かつたわ。八神。」

「ん。でも燐はどうしたんだか」
勝呂は八神に礼を言い、八神は辛うじて覚えていた燐の事を皆に聞く

「あつ！」

（皆忘れていたようだったが、廊下からどたどたと音がして来て。）

燐が帰ってきた。

「・・・」
「無事？」

卷之三

三三一の金額で（列外が一人）で到

1

その言葉に貢献者一人は（八神と勝呂）

「お前らも倒したのか？スゲーじゃ、え？フンブ！？」

勝呂はラリアットをし、八神はぶつ飛ばされた燐の上に轟石を乗っけた。
バリヨン

それを冷ややかに見る出雲はしづみを起していた。

「・・・、あたし、あんたが大ッ嫌い・・・・・・でも今回は助かつたわ。それだけ・・・！」
まどりつこしくはあるが、しえみに礼を言ひ出雲。

「・・・これは」

「雪男」

「先生」

その時、雪男が入ってきて、少し驚いているようであつた。

「…ネイガウス先生」

「…！」

そして、なぜかネイガウスが入ってきて、それに、さらになぜか燐が反応した。

此に病める者あつやの二（後書き）

さあ、此に病める者あつは終わりました！
次話からはオリジナル要素が強くなります！

誤字脱字の報告、感想お待ちしております。
いやほんとにお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5922x/>

転生者の祓魔師

2011年11月23日14時49分発行